

## 芦屋名建築ストーリー

大阪と神戸の間に位置する芦屋は、その立地条件と豊かな自然を背景にした魅力ある風土を礎に、全国でもまれにみる高級住宅地として発展しました。

大阪船場の商人・神戸の貿易商・外国人などが構えた豪邸は、今もその雄姿を芦屋にとどめています。



スケッチに描かれた洋館 児玉多歌緒スケッチブック「水明行」から（大正8年3月）。



今も残るスケッチブックに描かれた洋館とシーサイドタウンの高層住宅群

## 旧山邑家住宅

灘の醸造家山邑太左衛門氏の依頼で、日本の近代建築に深い影響を与えたアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトの原設計によって、大正13年に建てられた旧山邑家住宅（淀川製鋼所迎賓館）。

ライトは、帝国ホテル建設のため来日し、大正11年に帰国するまでに、日本で12の建物を設計しましたが、山邑家住宅はライトが設計した住宅で現存する唯一のものとして昭和49年に国の重要文化財に指定されました。



山邑邸全景 芦屋川に臨む丘陵地の突端、起伏のある敷地に建つ旧山邑邸。



2階にある応接間

中央に大谷石の暖炉があり、両側に大きな窓と備え付けのソファがある。照明器具、飾り棚、扉など細かなところにまでライト独特の幾何学的なデザインの装飾が施されている。



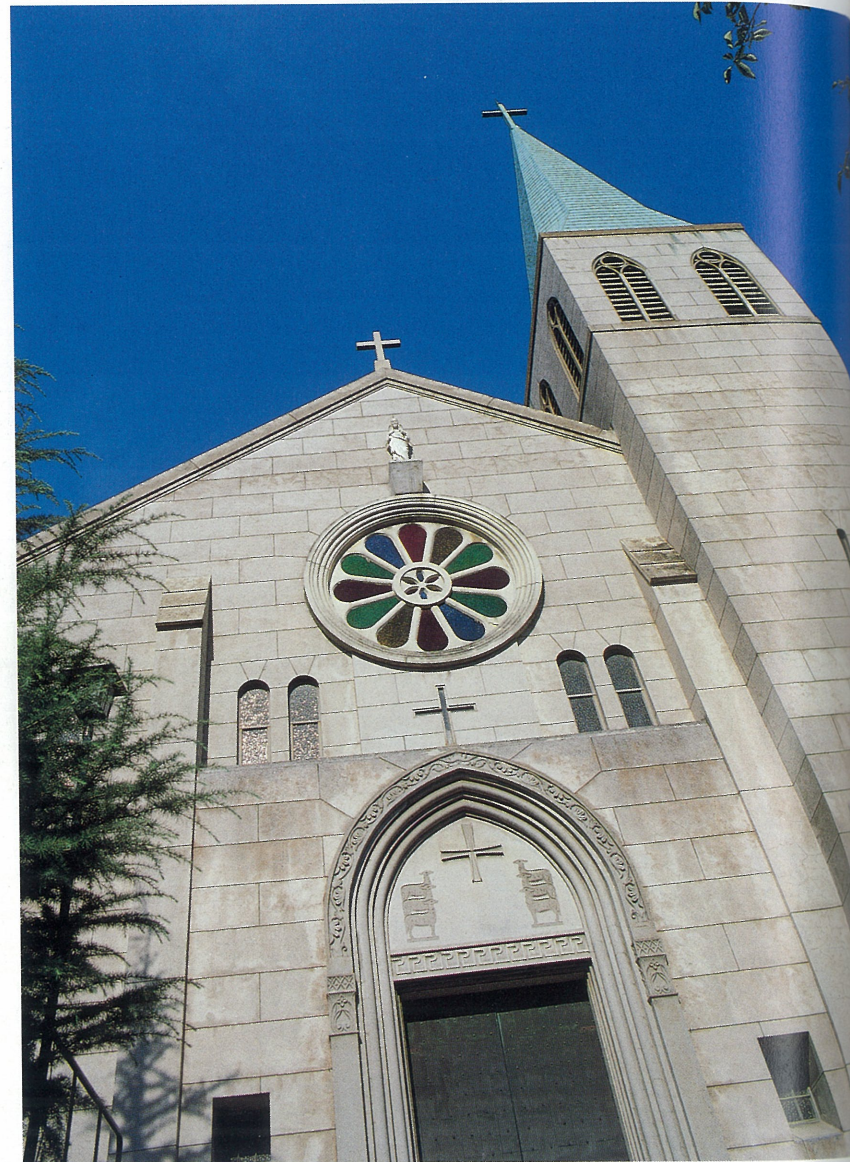


## 芦屋川に沿って

今日、市民の憩いの場として親しまれている芦屋川一帯の美観は、芦屋川の清流と松並木、そして河畔の街並みによって構成されています。

特に現在の平田町には、大正から昭和初期の洋館が点在しています。例えばこの時代に流行したスパニッシュ・スタイルの大邸宅をはじめ、アール・ヌーボーやアール・デコなど、さまざまな様式の装飾がみられ、かつてこの地に咲き誇った洋館文化を思わせます。

また、建築様式としては、純粋な洋館よりも和風の母屋に接客の場としての洋館が接続した邸宅が多いのも芦屋の特徴です。芦屋川畔では、それらが清流と松林を借景とする絶好の環境の中で、ゆったりと落ちつきのある街並みを形成しています。



芦屋カトリック教会 芦屋川畔の代表的な景観。



サンルームのある別荘(平田町)  
大きく開いたアーチ窓から、海辺の光と風がふんだんに取り入れられたアール・ヌーボーのステンドグラスが美しい。



スパニッシュ・スタイルの邸宅



平田町の街並み



芦屋川沿いに建つ洋館



平田町の街並み 洋館が松並木に映える平田町の街並み。街角をひとつ曲がると、今度は洋館から和風の家並みへと、道筋の表情が変わるのがおもしろい。



## 芦屋山手の街並み

芦屋川に沿ってさかのぼり、阪急電車の芦屋川駅を過ぎると急に両岸に山が迫ってきます。この芦屋川溪谷の入口にあたる山麓の斜面に、芦屋のもうひとつの顔である山の手の住宅街が開けています。

芦屋川をはさんで西には旧三条、旧山芦屋、東には旧東芦屋の各集落がもともとありましたが、大正時代から絶好の眺望を持つ別荘地として開発がはじまりました。変化に富んだ地形が建築家たちの意欲をかきたてたのでしょうか。このあたりにはライトの旧山邑家住宅のほか、わが国の近代建築史を彩る巨匠たちの住宅作品が残されています。



民家と洋館 赤い屋根の洋館と並んで建つ民家は、昭和3年近江八幡から海路移築されたよし葺きの旧家。門にかかる「五里庵」の銘は松方正義によると伝えられる。



滴翠美術館 昭和7年に建てられた山口吉郎兵衛氏の邸宅を、同氏のコレクションを展示する美術館として再利用したもので、安井武雄氏の設計による和風モダニズム邸宅。



アメリカ生まれの洋館(山手町) この地の洋館としては最も初期の大正11年に建てられた。原設計はアメリカで行われたが、あまりにも壮大であったため縮小して建てたという。



東芦屋山麓の洋館(東芦屋町) 大正12年、この地に別荘地を開こうとした元外交官竹内氏によって建てられた。



塔のある洋館(六麓荘町) 昭和11年に建てられた塔(展望室)をもつ洋館。



六麓荘町の街並み



## 芦屋浜周辺

かつて漢人の浜（からひとのはま）と呼ばれた芦屋浜も、明治38年の阪神電車の開通と同時に芦屋と打出の停留所が開設され、打出浜には海水浴場も開かれるなど、海浜別荘地として注目されていきます。

もともと浜芦屋、打出方面は、近世以降に開かれた新田地帯で、それぞれ農村集落を形成していましたが、停留所に近かったため、大阪や神戸から移り住む人びとの住宅が早くから建ちはじめました。

現在、旧芦屋海岸の名残をとどめるかつての防潮堤は、散歩やジョギングのコースになり、この北側に点在する松の木立に囲まれた和風邸宅や、モダンな洋館が、昔日の海辺の雰囲気を与えています。



海辺の街並み(松浜町、伊勢町) 海岸にいたる旧道に沿って、大正初期の材木倉庫が並び、古き芦屋をしのばせてくれる。



三菱鉱業セメント「松籟荘」(松浜町) 大正9年、大阪の旧家によって建てられた伝統的な和風別荘。美しい庭園に白砂青松の面影を残している。



関西電力打出クラブ(浜町) 大正9年、打出浜近くに建てられた大邸宅。和風を基調としながら、内部にはモダンな洋室も備えている。



関西電力打出クラブ

浜芦屋の旧家(浜芦屋町) 大正11年に建てられた堂々たる門構えの和風住宅。この界限は、迷路のような奥深い路地に沿って旧家の塀が続く。



浜芦屋の旧家



浜芦屋の旧家



## いまでも残る農家の面影

のどかな農村であった精道村は、この1世紀の間に別荘地から、郊外住宅地、そして住宅都市芦屋へと大きく変貌しました。

しかし、こうした近代～現代の歴史の流れを越えて、芦屋の原点を語ってくれる街並みが、浜芦屋のほかに市の北西部の三条町と北東部の岩ヶ平（岩園町）に残っています。

現代の都市空間にはない、懐かしさと安らぎを持った風景は、貴重な歴史的遺産であり、時として未来への示唆も与えてくれるでしょう。



旧三条村のメインストリート(三条町)



重厚な打出瓦葺きの旧家(三条町)



岩ヶ平の田園風景(岩園町) 17世紀に新田開発が行われ、旧打出村最北の集落を形成した。



旧三条村の街並み 旧三条村は、17世紀以来、尼崎藩に属し、小村ながら農業や水車産業で栄え、近代に至るまで高い自治性と伝統を維持してきた。



江戸時代の建築様式を残す民家(三条町)  
元禄3年の三条村絵図にも見られる芦屋で最も古い民家。当時の庄屋の住宅で、入母屋造りの大屋根はいまはトタンで覆われているが、かつてはよし葺きの堂々たる姿を見せていた。